

今を生きる保育現場

取りこぼした経験はないのか、圧倒的な体験の不足はどう取り戻すのか、自問自答する日々。その一方で、緊張と制限と疑問符づくしの中で重ねてきた自分たちの経験を、〃なかったこと〃にはしたくない気持ちもあります。

あらゆる場面で子どもたちに「コロナダカラシカタガナイ」と言わせてしまう日々ではあまりにも切ないと、父母や保育者たちはできることを模索して、「今を生きる」子どもたちと向きあってきました。

上から下りてきた「ルール」にただ従うような思考停止に陥らぬよう、自前の感染防止の学習会をくり返し行い、行事や保護者との懇談会などは、どんな形ならやれるのか、論議を続けている現場もあります。私たちの園でも、「なぜ、この時期にこれをやるのか?」「子どもから見たときに、これまでのやり方はどうだったのか?」などと問い直すことで、あたりまえに続けられてきた恒例行事の本質を見極めるきっかけになりました。

子どもたちも、父母の会話など周囲の状況から子どもたちなりに「今」を理解しようとしています。緊急事態宣言下、自粛保育となって登園人数がぐっと少なくなる中、毎朝「お友だちがいない」と泣いている三歳児に、同じく登園を続ける五歳児が、「あなたのお母さんは何のお仕事?」と声をかけていました。「私のお母さんは、赤ちゃんを産む人たちが待っているから、病院に行っているんだ」と自分の家の事情を説明し、その三歳児に「きつとお仕事は休めないんだよ」と言って励ましているのです。

一か月あまりの自粛保育は、大切な気づきもたらしました。普段の三〜四割程度の登園率となつて、凶らずも北欧並みの保育士配置基準での保育を体験する機会となつたのです。すると保育者の中から、「子どもの小さなつぶやきにも、しっかり向きあえた」「一人ひとりの子どもたちの発達要求から、ていねいに保育を組み立てることができた」「週案が変わつた」と、今までとの違いに愕然とする声が巻き起こりました。私たちが本当にやりたいゆとりのあるあたたかな保育、各家庭の状況や一人ひとりの子どもの気持ちに寄り添った保育は、このくらいの少人数でないと行えないことを、身をもって思い知つたのです。

今もそうやって、現場で奮闘している保育者がたくさんいるのではないのでしょうか。そしてそのかたわらでは「もうがんばれないよ」と現場を離れようとしている保育者がいるかもしれない。本当だよ。こんな職員の数では、私たちのやりたい豊かな保育なんてできないよね……。

今こそがんばっている保育者たちに、そしてお父ちゃんお母ちゃんたち、子どもたちに、心から「がんばっているね、私たち」と共感のメールを送りたい。「みんながいるから大丈夫だよ」の安心感で包みたい。社会がどうなるうとも、「子どもたちって前を向いているよ

ね」「私たちが本当に大切にしていた保育はこういうものだったよね」と確認しあいたい。ああ、会いたい。各地の子どもたちとともに過ごしている、あの人たちと話したい。私の心は、その願いではちきれそうです。

そんな強い思いに駆られて、再び現場からの思いを発信することにしました。この本は、雑誌『ちいさいなかま』（全国保育団体連絡会編、ちいさいなかま社刊）に二〇一〇年四月から二〇二〇年三月まで十年間連載させてもらった保育の仲間たちへのメッセージを抜粋・再構成したものです。園での出来事や出張先で出会った人々との語り、その時々々の制度問題や予期せぬ災害など、テーマは多岐にわたりますが、保育の普遍的な根っここの部分や、まさに今求められている、そしてこれからの「新しい時代」へと続いていく保育の役割まで、名古屋で保育をしている一保育者が、子どもたちと保護者と仲間の保育者たちとともに綴った「保育の実感」であり、「叫び」といってもいいかもしれません。